

アラブ・日本人租界のドクター事情

岡本 文夫（元アラビア石油、元国務大臣政策担当秘書）

日本を離れること 1 万キロ。日本人オイルマンがサウディアラビア王国の原油生産現場で勤務する上で必須となる医療環境を軸としてドキュメントしてみよう。

筆者が現地駐在した通算 8 年間。約 130 人の日本人が常駐し操業に従事する中、病気で亡くなった同僚が 3 名。交通事故死が 2 名。開発権益更新の応援に来て頂いた通産省 K 部長も、交通事故で殉職された。如何に厳しい現場であったかを物語っています。

更に、湾岸戦争に先立つ湾岸危機と称する半年間は、サウディ政府の厳命により退避が許されず、「死にたくない！しかし逃げられない！」という過度の拘束性ストレスから、6 名が発癌。イラク軍の猛砲撃で殺された者は、幸いにしていなかったものの、日本での治療虚しく逝去した日本人従業員が 3 名いたことも悲しい事実です。

第四章 日本人食堂

子供の教育や老親の介護といった事情から、百三十人の日本人従業員のうち約九十人は単身赴任を余儀なくされていた。また、家族帯同組も家族ビザ取得に軽く半年はかかるから、その間は食堂でお世話にならねばならない。

そこで、鉱業所には従業員の自治運営の日本人食堂が設置されていた。医者と同様、こんな僻地まできてやろうという奇特定の料理人はいないから、委員会は海運会社と契約して、継続的に船乗りのコックの派遣を受けていた。一度海に出れば、長期間家庭には戻れない職種だ。就業環境的には、アラブの原油生産基地も長期航海船も似たようなものだからだ。

日射病から癒えた頃、筆者には食堂運営委員の役目が回ってきた。日本人コックは二人いたのだが、筆者の入院中『これは、死にそうだ！』と不遠慮に叫んでくれた菊井がチーフであった。

「岡本はん。よう死なんで済んでよかったなあ」
マドロス・コックの菊井は、ズケズケとものを言う男っ気を売りにする任侠型の男だった。筆者は柔道の余技として松濤館流空手道でも黒帯を許されていたが、

菊井も同門の修行者であることが解って、ふたりの仲は一層深まった。運営委員の役得で、自分が食べたい物があると、メニュー構成にも意見を述べることができる。

「菊井さん。みんなが寿司を喰いたいって泣いてるよ。そういえば、しばらくメニューに登場してないよねえ」

「あのなあ。寿司は下こしらえが大変で、一番手間がかかるんやでえ」

「でも、菊井さんが握ってくれる寿司が食べたいなあ」

甘えられると、悪い気がしないのが人情だ。数日後には、ちゃんと寿司が食卓を飾って、男たちを喜ばせた。

頑健な現場の男たちの集団だから、日本人食堂が夜七時に閉まった後で、夜食が欲しくなるのは当然の成り行きだ。菊井はそれを見越して、常に大目に料理して残飯を確保していた。夜になると、従業員たちもあうんの呼吸で食堂に隣接するコック部屋に集まった。毎晩十人前後の男たちが、飲み食いしながら二卓を囲んで麻雀に興じたものだ。

筆者にとって命の恩人となった後藤ドクターも、かなりの頻度でコック部屋のお世話になっていた。カフジの男たちにとって菊井コックの働きには貢献大なるものがあつた。

とんでもない現場に来てしまったとの後悔がうかがわれ始めた後藤ドクターを、音在はそれとなく励ましたものだ。

「先生、もうすぐ家族が到着したら、我が家で居候して下さい。女房は料理が得意ですから、楽しみにして置いて下さいね」

筆者のコック部屋運営への寄与は大きく、先輩たちに歓迎されていた。すぐ前は遠浅の海岸になっており、大潮で引き潮のタイミングにはかなり沖合まで出漁可能だった。筆者はヘッドランプを付けての夜突き漁を得意としていた。東京湾のように汚染されていない海だから、漁果は豊かだった。胴体だけでも30センチを超える肉厚のモンゴウイカを必ず突いてきたし、たまには60センチもあるコチを獲ってきた。ひしゃげた魚体には似つかわしくないきれいな白身が美味な食材を提供されると、菊井は板前の血が騒ぐらしくイソイソと厨房に立って、大皿に二枚の見事な刺身を作って仲間を喜ばせた。

ある夜、ヘッドランプは頭の大きな60センチ以上もある魚体を照らし出した。『おう、ハムール（ヒトミハタ）じゃないか！』

中国人なら、海鮮料理で最高のご馳走とする清蒸（チンジョン）の対象魚だ。ただちに、筆者は手練れのモリを一閃。突いた場所は首だった。肉を鬱血で傷めないようにするためのプロの技だ。モリの先から伝わる重量感を伴う抵抗が大物獲得の満足を現実のものとした。

『さあ、みんなが喜ぶぞ！』

ところが、魚は大暴れしながら、見る見る膨らんでいくではないか！

ハタかと期待した漁果は、アラビア湾ではそれまで見たこともない最大級のトラフグだったのだ。

「いいもの獲ってきたぞ。で、菊井さんはフグの調理はできるんかい？」

「エエッ！フグかあ、やったなあ！任せなはれ！」

十人ほどの常連は、生唾を飲みながら内地でしか食べられないフグ刺しを待っていた。大皿に菊花模様に並べられた肉厚な刺身の登場に、思わず歓声が沸いた。菊井の腕前はさすがだった。アラブの原油生産基地の飯場に過ぎないコック部屋で供される刺身なのに、酢醤油に紅葉おろしまで添えられているではないか。一斉に男たちの手が伸びそうになったのだが、筆者は最後に念を押した。

「菊井さん。フグの調理師免許、ちゃんと持ってるんだろうね」

菊井の返事は、ややトーンが下がっていた。

「ナアニ。免許なんか持ってへんけど、フグなんか簡単や」

全員から伸びた箸が、ピタリと止まった。しかし、その善人ぶりを全同僚から愛されている生産部の佐藤速男先輩が、躊躇なく手を出して秋田弁で感嘆の声を上げた。

「ヒヤア！これ、うんめえ！」

筆者も、材料提供した責任から、二番箸をつけて驚嘆した。

「これ、本当に美味しいわ！」

後は、一気呵成。大皿一杯に並べられた厚めのフグ刺しが無くなるまでに5分とはかからなかった。

本当は、これでは駄目なのだ。フグ毒のテトロドトキシンがまわるまでに一時間を要する。最初に食べた佐藤に呼吸不全の症状が現れるか否か、一時間待たなければいけなかったのだ。しかし、全員がアラブの地では絶対に巡り合えないはずの美味を堪能したのだが、幸いなことに事故は起きなかった。

「あれ？それで菊井さんは刺身食べたんかい？」

「ワシなあ。フグは嫌いやねん・・・」

強がって答える菊井だったが、その声はさらにトーンが下がっていた。

男っ気が売りの菊井コックが、2年間の契約を終えて帰国する時は、いかにもマドロスらしい去り方だった。

親交があった主な仲間だけに、前日にこっそり挨拶回りをしたものの、当日の見送りは拒否したのだ。カフジの慣例では、帰任者の出発には日本人従業員が山ほど見送りに集まるものなのに。

「岡本はん。あんたにはホンマ世話になったわ。明日、カフジを離れるんで、一

言だけ挨拶させてもらうで。それで、見送りは断るからな」

筆者は、菊井の性格をよく理解していた。苦しい時ほど強がって見せるくせに、本当は情が深く寂しがりやなのだ。厳しい現場での励まし合いを共有してきたぶんだけ、思い入れたっぷりに長々と別離の挨拶をするのは苦手としていた。筆者も、明るく別れた。

「いやあ。お世話になったのは俺の方ですよ。死にかけた時に病院まで重湯を運んできてくれたのは感謝するけど、『エエッ！これ、あかんわあ！』と叫ばれたことは忘れませんよ。ハハハ」

それから三か月後、部下への指図に忙しい筆者のデスクに国際電話が入った。原油販売の締めくくりが SHIPPING（原油出荷）であるので、本社営業部からの業務連絡は珍しくないのだが、その日の電話は先に本社経理部へ帰任していた弟分の今村からのものだった。

「おう、元気か？ どうだい、東京での生活は。築地の江戸銀へ行って寿司喰ったか？」

「岡本さんこそ、お元気ですか？ また、日射病で死にそこなわないように注意して下さいよ」

今村からの電話は、菊井コックからの依頼によるカフジ凱旋の予告だった。本来の乗船勤務に戻った菊井が、25万トンの堂々たるタンカー・エルベ丸に乗って、カフジ沖まで来航するという。その際、筆者は必ずタンカーを訪れるようにとの菊井らしい仁義の返し方だ。

通常の原油出荷のルーチンワークはパレスチナ人の部下たちに任せてあった。日本人管理者が乗船するのは、何かトラブルでも発生して責任者同士の調整を必要とする時くらいのものだ。しかし、3週間後にカフジ沖合に到着したエルベ丸には、筆者自らがオンボードした。

遠浅のアラビア湾なので原油搬出施設は18マイル沖合にあり、高速連絡艇がスタッフを運ぶ。本当は極めて私的な訪問だが、会社代表として乗船するのだから、船長には何か公的な格好をつけなければならない。筆者は、カフジ港のポートルギュレーションを持参して、サウディアラビアという難しい国における各種の禁止事項を説明しようとした。ところが、酸いも甘いもかみ分けている船長は、名刺を交換して挨拶しただけで、対話を切り上げた。

「ああ、岡本さん。いいです、いいです、解ってます。司厨長から、陸でどれだけお世話になったかよく聞かされてます」

全く説明を聞こうともせず、船長室付きのスタッフに指示をした。

「オーイ、司厨長を呼んでくれ！」

ニヤリと笑いながら、のっそりと菊井が現れた。本社に帰任した菊井は司厨長に

昇格しており、武道の有段者が黒帯を許されるのと同じ権威づけで、白衣の和式作業衣の襟が黒く縁取りされていた。筆者に乗船を求めた目的のひとつが、この晴れ姿を見せようという男伊達にもあったのだろう。

「岡本はん。来はったんかい」

先ず案内されたのは自慢の職場であった。遠洋航海の大型タンカーの厨房はさすがの規模と設備を誇っていた。

『ホンマのワシは、あんなこ汚い飯場のコックと違うんやでえ！』

説明する菊井の横顔には誇らしさが溢れていた。三人の部下にも海軍式の気合が漲っていた。

「エエか、みんな！これが、お世話になった岡本はんや。今日は昼飯を食べて頂く。陸では絶対に食えんご馳走や。みんな、気合入れて調理せえよ！」

「ハイッ！」

敬礼でも飛んできそうな雰囲気であった。

次に連れて行かれたのは、司厨長の個室であった、オフィサーにはブリッジ内に冷蔵庫やビデオデッキ他の電化製品が備え付けられた部屋が与えられている。

「岡本はん。くつろぎなはれ。それから、へへへ。これがあちこちの港で仕入れてきた写真集や。1時間後にご馳走運ばせるさかい、ゆっくり休憩しときなさい。あ、ドアには鍵かけとくからな」。

如何にも菊井らしい配慮ではないか。日本人にしてみれば当たり前の嗜好や娯楽を禁じられ、丸一日どころか長期休暇でカフジを離れるまで異性の顔も拝めない環境に耐える旧友のために、つかの間の休養を与えようとしたのだ。呼びつけたくせに懷旧談をするでもなく、施錠した個室に一時間も放っておこうというのは、菊井なりの深い思い遣りだった。

高速艇を呼び戻して帰路につくとき、菊井は舷側までは送ってきてくれた。

「相変わらずいろいろ大変やろけど、健康に気をつけるんやで。それじゃ、な」
筆者が高速艇に乗り移るのを確認した菊田は、プイッと踵を返して船橋に戻っていった。

カフジを去った時と同様に、手を振りながら遠ざかる高速艇を見送ることなど、菊井のマドロス道に反するのだ。一方、筆者は菊井の友情に感謝しつつ、エルベ丸を擬人化して、日本まで無事に原油を送り届けてくれよと念じつつ、いつまでもタンカーを見詰めていた。



おかもと・ふみお

1947 年生まれ。アラビア石油勤務を経て、元国務大臣・村田古隆衆院議員の政策担当秘書を務めた。2013 年「小説湾岸戦争 男達の叙事詩」（財界研究所刊）を伊吹正彦のペンネームで出版。講道館柔道五段（クウェート国柔道連盟七段）。

To be continued